

赤穂浪士

中 卷

大佛次郎

赤穂浪士

中 卷

大佛次郎

光風社版

赤穂浪士
中巻

昭和三十九年一月十五日 印刷
昭和三十九年一月二十五日 発行

定価 三二〇円

著者 大佛次郎
発行者 豊島清史
印刷者 氷川印刷株式会社

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話 東京 (五七)〇二三八番
振替 東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

嵐 万 城 ま た っ 遠 夕 炎 涼
の び た ゆ 目 鏡 顔 天 亭
峠 び 空 鏡 顔 天 亭

一〇四 允 允 允 允 丑 丑 亥 七

二 人 侍
邪 道
月 夜 鴉
秋 の 庭
続 月 夜 鴉
武 士 道
分 裂
悪 あ が き
秋 風

二二
二三
二四〇
二五
一六
一五
一七
一八
二五〇

装
幀

佐
多
芳
郎

赤穂浪士
中卷

嵐

哀願の使命を帯びて江戸へ赴いた多川九左衛門、月岡治右衛門の二人が、敷居の高いおもいで赤穂へ戻つて来たのは四月十一日のことだった。藩士全体の期待を受けて自分達も責任の重いことを充分に自覚しながら悲壮な覚悟を以て出て行つた時とこれは反対に、二人は故郷に近くなるほど、鉛を呑んだような重い感じに心をおかされて口数すくなくだまり込むことが多くなつた。特に二人の良心を責めていたのは、出立の際に内蔵助からくれぐれも江戸家老、安井、藤井の兩人には見せるなといわれた嘆願書を、たとい不運にも受城使の出発と行き違つたにもせよ二人に見せてしまったことである。

ああすればよかった、こうすればよかった……

様々の思案が遅ればせに浮かんて来る。しかし、まことに後悔さきに立たずである。途中で受城使の一行にも追い付いていたが、御親戚の戸田采女正様、大学様

のいずれからか藩士一同にあてた論書を預かつて来ている身であつてみれば、それを棄てて最初どおりの嘆願も出来かねるように思われた。行きと違つて帰りの道中は実に短く感じられた。内蔵助が如何に激怒することかと思つと、魂身にそわず悄然とした。

内蔵助は、采女正の論書をよんだ。

多川九左衛門、月岡治右衛門両使を以て書付差越し候紙面の趣家中の面々無骨の至、御当地不案内の故に候。内匠日ごろ公儀を重んじ奉り勤仕いたされ候段は各々存知のことに候。内匠へ家来中奉公の筋はすみやかにその地を引払い城滞りなく相渡され候段、公儀を重んじ奉り内匠日ごろの存念に相叶うべく候間申すに及ばず候えども、おいおい指図のとおりこれを相守られ早速穩便に退かれ候段、肝要のことに候。この旨家中の面々これを承知し納得あるべきもの也。

巳四月五日

戸田采女正 判

浅野内匠家老中 番頭中 用人中 目付中 惣家中 追啓 御当地に詰合候面々は、最初より右の旨談す

ることに候。以上。

ただただ城を開け渡せというのである。これは采女正様からのお手紙と聞いた時、内蔵助にはわかっていたことだった。内匠頭の弟大学の手紙も同じようなことをいって来ている。最後に、江戸家老安井、藤井の兩人からも嘆願など以てのほかのことだと、くどくどしく書いて来ていた。

内蔵助は、この全部を読んで、微笑した。

「なるほど、これは御親戚らしい御意見だな」

ただ簡単にこういった。

何ゆえおれが最初いったとおりやらなかったか？

これは愚痴である。この二人をもっと覚悟のある人間のように信じたのは、あきらかに自分の眼鏡違いであった。何もいわず、内蔵助は二人を立ち去らせた。

御親戚の意見など今更承わらずともよくわかつているのである。この度内匠頭がしたことだけでも迷惑しているところへ、今度はその家来達が何かやると聞いている、親戚たるものがいよいよ狼狽するの無理はない話である。

次の日になると、戸田家の家臣正木笹兵衛、荒渡平右衛門の二人が采女正の別の手紙を持って、赤穂へ乗り込んで来た。采女正は、多川、月岡に渡した手紙だけでは不安になって、またこの二人を寄越したのだった。

二人が来たと、主税が父親のところへ知らせると、内蔵助は、やれやれうるさいなというような顔付で皮肉な微笑を漏らして立ち上った。

開城……

内蔵助が突然に提議したのはこれであつた。四月十二日、戸田采女正の使者が江戸から来た日のことである。籠城をやめ殉死をやめ城を明け渡す理由として、内蔵助は「御親戚方の御意見」をたてにしていた。その主筋にあたる方々の御意見はかくかくである。これを無視することは如何か？ 自分達のすることが御親類方殊に御舍弟大学様に影響を及ぼすことをよく考えて見ねばなるまいというのである。

この日は、江戸へ嘆願に行った多川、月岡の兩人が昨日戻って来たと知れわたっていたことで、江戸の首尾は如何かと、藩士は殆ど漏れなく通知に依じて参集

していたので、大広間は人が溢れていた。

開城……

座に電流の如く、わたったものがある。高さも平均して揃った稲田を眺めるように規則的にならんで遠くなるほど濃く見えた袴はかまの肩が波のように動いた。幾百となくならん顔が、めいめいに興奮の色を泛べて動いている。突如として、その一角がふくれ上るよう突起を作ったのは、顔を赤くして立つて大声で叫び出した者があったのを周囲の者が争って制したのである。その者の声は聞きとれなかった。座は騒然として湧いている。別の方角から、

「それが御家老の御量見か？」

と叫んだ者がある。これは内蔵助の耳にもはっきりと聞こえた。また、これを制している者が見えた。内蔵助は、風のわたる雑木林を見ているような心持だった。

過日の連判に加わった者が、不安を抑えた目付で、自分の方を見詰めていることも知っていた。また隣に小さくなって坐っていた次席の大野九郎兵衛が、興奮した様子でにわかに前へ乗り出して、しきりと膝を動

かして爪を噛んでいるのも知っていた。

(あらし……あらし……)

胸の中で、どういうものか、こうつぶやいている自分に気がついて、思わず微笑を感じた。

成程これは嵐だ。しかし、困難は、むしろこの後に来るのである。こんな嵐はすぐと過ぎる。騒ぐのは無理もないが、また馬鹿である。静かに、静かに……内蔵助の大きいひとみは、こう語りながら、海を照らす燈台の光のように座を押さえている。

何か叫びながら、荒々しく席を蹴って出て行った者もあって、この大広間を一つの水盤としてその水のようによれ動いていた一座も、やがて段々と静かになって来た。

「御意見は？」

ぽつりと、重いくちびるが動いた。

「いや、御城代の仰せ、御尤千万。われ等にさらに異存は御座らぬ」

勇ましくこういい出したのは大野九郎兵衛だった。

「御親類がたの御迷惑も一方ならぬ儀じゃ。先君の御忠節もこれによって相立つ。御承知のとおり拙者は、

そもそのものはじめからこの意見でした」

その勝ち誇ったらしい様子が内蔵助の腹の底に微笑を呼んだ。

頷く者がある。「千万致し方御座らぬ」といい出す者がある。内蔵助は、厳肅に、

「では、これを藩としての意見ときめる。向後も城の明渡しの済むまでは自分一存の指揮に従ってもらいたい」

といって、立ち上った。

と見て、ばらばらと立って帰る者が多かった。家には妻子が事の成行を氣遣つて待っているのである。籠城だの殉死だのと様々の説が行なわれて、去月来い（きげん）うばかりなく落着きのない不安な日が続いていた。浪人になるうという好くない運命にしろ、きっぱりと定めてしまえばまた一肩おりた心持で、これから、どうするか？ 早くきめた方が勝だ、と何となく先を争わねばならぬような気持も働いて来る。しかし、また心から絶望を感じたように俄に動こうともせず、席に残って黙然とうずくまっている人々もあった。

（あらし、あらし……）

内蔵助は、心持うるんだ声でこうつぶやきながらいつもより厳めしく顔の筋肉をひきしめて、廊下をさがって来るのだった。

大野九郎兵衛も、すぐは屋敷へ帰らずに城中に帰っていた。九郎兵衛は、開城ときまって、やれやれと安心した方の一人だが、散会となつて内蔵助が立つて行くと同時に、自分も立ちながら、付近に坐っていた玉虫七郎右衛門に目くばせして廊下へ出た。

「やられましたな。まんまと、一ぱい食わされた」

九郎兵衛は苦虫を潰したような顔付になつて吐き出すようにこういった。

玉虫が、この言葉の意味がよくわからなかったように無言でいると、

「つまり……」

と、丁度廊下の行手に曲ろうとしている内蔵助をあごでさして、

「寛厚をよそおっているが、実に驚くべき策師だ。心にもなく殉死の籠城のといひ立てていたのはわれわれを疎外するためにきまっている。今の今となつて、開城とはよくいえたものだ。われわれも正直すぎた」

「左様でしょうか？」

「そうだと、そうだと、それに違いない。近頃のかれの専横振りはどうだ？　先君御在世のみぎりは、何事も不肖この九郎兵衛をおたのみ遊ばされ殊に金銭の出納について、殖産について及ばずながら一切のきりもりをして来ている。ところが、この度のことあつてにわかにかれがのさばり出て永年の経験から出た私の意見など風馬牛の態度をとるようになったのは、いわれなくてはかなわぬところだと思っていた。いや、今日になってかれの肚も知れた。実に呆れはてたる人物だ。つまりはわれわれが小心なことを承知で、籠城じゃ殉死じゃと血の氣の多い無法者達の人氣をとつて巧妙にわれわれを圧迫して沈黙させ、陰で独存でうまく利をはかったのは知れたことだ。油断はなりませぬぞ。遅滞ながら今日以後は言うべきことは言って、厳重に監視せねば……とんだ目を見ますぞ。ほかの場合ではない。これから一同が扶持をはなれて浪人しようとする際に、いや、実に怪しからぬ男だ」

「あるいは、そんなことだったかも知れぬな。何しろこのどさくさの際ですから、やろうと思えば何でも出

来る。金穀の分配について、殊に下の者に厚くしようとしたことなど、やはり人氣取りの策でしたらう」

「そうだと、それにきまっている。実に驚き入ったる根性だ。われわれの多年の功勞など、最初から知つて知らぬ顔じゃ、無論、あの男だから相当味方を手なずけてそれとわからぬように巧みにやっています。うが、この際何とかせねばならぬ自衛の問題だ。岡林氏外村氏にも、話して置きたいが……」

「お、外村があれへ……」

まことに外村源左衛門が誰か人を探している様子で大広間の入口にあたりを見廻しながら立っているのが見えた。

「外村氏……」

と、玉虫が呼ぶとはッとした様子でいそぎ足で来て、「御家老、すばしい奴がいます。札座役人の中で小判をつかんで行方をくらました男があるといひます」

「えッ？」

「開城ときまる……と早速ですからあきれます。すぐと、奉行の岡島から訴え出て、追つ手を出したそうですが……ひどい奴があるものじゃありませんか？」

「そ、それだ！ そのくらいなことはあるよ。だから
いわないことじゃない。よほどの大金か？ 一体、誰
だ？ ふむ、そりゃア小役人どもばかりのしたことじ
ゃない。奉行だって、どんなものか……」

「もし、原がいます」
と外村が注意した。

原惣右衛門は札座奉行岡島八十右衛門の家兄にあた
る。九郎兵衛の声を聞いて、惣右衛門がきツとして振
り返ったのが見えたのだ。

「むむ」

と九郎兵衛は口をつぐんだが、二人をさそって歩き
だしながらまた小声で、

「油断ならぬよ、火事場泥棒という奴だ。どこにどう
蔓がつながつているかわかるものか……用心が大切じ
ゃ」

廊下をまがろうとしたところでまた気になってそつ
と振り返って見ると、惣右衛門が立ち上るのが見え
た。九郎兵衛はぎょっとしたらしくふとった玉虫の軀
の蔭に隠れるようにして、にわかに小刻みにいそぎ足
になった。

すこし行つて、また振り返って見ると、惣右衛門は
つかつかといそぎ足で後を追つて来る。

九郎兵衛、狼狽していいいよ足をはやめて、玄関へ
出ると、真ッ直ぐに屋敷へ帰った。

「玄関をしめて置け。今日は誰が来ても不在だとい
うのだ。誰にも会わぬぞ」

門番にいいきかせて、そこそこに家にあがる。間も
なく、惣右衛門が来たらしく、門内で門番と高声で話
しているのが聞こえて来た。

「御他出か……？ 然らば、後刻舎弟八十右衛門が参
上つかまつるゆえ、必ず御在宅を願うとお伝え置き下
さい」

九郎兵衛は蒼くなつた。

殊に、金穀の第二回の分配が最近にあらうというの
で、その割当について内蔵助に主張したこともあるの
だが、これは、意外の口禍である。

「郡右衛門、郡右衛門……」

と長男を呼びだした。

「早速だがな、うう、これからお城へまいって玉虫氏
外村氏に会つて、ちとお話し致したいことがあるから

おいで願いたいと……あ、いやいや、御両所が来られては、私のいることが知れてまずい。うう……おお、こ
うじゃ。この度の配分の目安はな、前のように知行高^{ちぎょうだか}
の多いほど率を減ずるといふのは、穩当でない。大身
には大身の分限あって、小身とは違ひ、入用も多い、
なるべくならばこの度は知行高に應じて割り当てるよ
うに致すのが公平と思うゆゑ、方々の御尽力を仰ぎた
い、この際同志の結束を堅くして連名でこれを申し出
たいから、しかるべく願う……とな。うう、それから、
誰か一人、味方の者が必ず役所に居残つて、不正のなき
よう充分用心する手筈をとってくれるよう……よくお
話し致して来い。私の考えは、その方よく存じておる
な？……うむ、やはり、誰か一人来てもらおう。失礼
ながら、裏口から、と申せ、さ、さ、早く」

が、このままで、いつまでも留守をつかつているわ
けにも行かない。自分で出て行つて万事監視しておら
ぬと、どんなことが起ころうかも知れないように思わ
れる。

九郎兵衛がしきりと爪をかねで考え込んでいるうち
に、

「たのもう」

と玄關で呼ばわる者がある。

札幌奉行岡島八十右衛門の声だ。

（来たな！）

と、九郎兵衛は仰天して、

「留守といえ。何で、門内へ通したのか？ 他出だ、
他出だ」

「たのもう！」

玄關では、ひとときわ高くいう。

岡島は、兄から始終を聞いて、烈火の如く立腹して
来たのだ。

「ただ今、主人は他出中に御座りまする」

「他出？ ふむ、何刻ごろ戻られるか？」

「それも、ちと、わかりかねますが……」

「八十右衛門、至急拝顔を得たい儀があつて参上つ
まつた。御帰宅あつたれば必ず早々お知らせ願いた
い。明日といふことはなりません。火急の用事じゃ。

御案内なくば、手前の方から伺います」

清廉で氣骨のある男だ。殊にこの度の大変にあたつ
て九郎兵衛が示した卑劣な態度をかねて憤慨していた

ところへ、痛くない腹をさぐられ賊呼ばわりされたことで、返答によっては一刀兩断と思ひ詰めて掛合ひに來ている。

「真蒼なお顔色をしておいででした」

取次の者が九郎兵衛にこう報告した。これを聞く九郎兵衛の顔色といったらなかつた。

弱った。弱った……と思つている内に目がくれる。

弱った、弱った……は、来るぞ、来るぞ……とまるで尻尾に火がついたような脅迫観念と變つて、門口の方に足音のする度に席から腰を浮かせた。

「戸、戸を締めてしまえ。それから岡島のところへ使をやり、今宵は差し迫つて用事も御座れば、お目にかかり難いといわせて來い」

九郎兵衛は、自分の臆病な心持がなさけなかつた。

これは確かに自分の性格の唯一の弱点である。他の点では、自分は正しいのだが、小心だということはこんな場合にはまったく致命的だ。もっと勇氣があつて鬭争を敢えて辞さない人間に出來ていたら、岡島如き暴漢を恐れぬばかりか、今度のことなど大石づれに勝手に掻き廻されずに済んだのである。

まったく人間というものは、どれだけ時世が進んでも、やはり腕力が最後の勝を占めるものだろうか？
九郎兵衛は、それを考えると、つくづくと情なくなるのだった。

「頼もう！」

意外に、岡島の声が玄關で聞こえた。

「病氣だ……病氣だといつてことわつてくれ……」

と、あわてて、家人にいった。

短氣の岡島は、玄關の戸へ手を掛けて、がたがた鳴らしている。

「至急の用で御座る。おやすみになつていられてもこちらは差支御座らぬ。おあけ下さい」

戸を隔てて押問答をしているのである。

九郎兵衛は、實際恥を忘れて戸棚の中へ隠れたくなつた。

岡島の声がまたいった。

「九郎兵衛殿にはお城において、この八十右衛門が札座の御用金を私したかのように噂せられたと承わる。武士の恥辱この上はござらぬ。右につき、しかと御所存承りたいのだ。なに、左様な覚えはないといわれる？